

## B に倣いて

若島 正

柴田さんが早期退職する<sup>1</sup>ので何か寄稿をと依頼されて、すぐに思い浮かんだのは、名著『生半可な學者』<sup>2</sup>について書こうという案だった。ところが、その『生半可な學者』が、本棚のどこを探しても見つからない<sup>3</sup>。やむをえず、搜索途中に発見された『愛の見切り発車』『死んでいるかしら』『猿を探しに』を机の上に積み上げてみたが、やはり当初の案からずれているという思いがつきまとう。そうこうしているうちに、締め切りがとうに過ぎてしまった。

原稿が遅れている言い訳は、物書きがつねに何種類も用意しているものである。曰く、体調がすぐれない<sup>4</sup>、身内に不幸があった<sup>5</sup>、原稿を書いている途中にパソコンがフリーズした<sup>6</sup>、などなど。そういう言い訳を頭の中できちんとしながら、時間だけがどんどん経過していき、締め切りから一ヵ月ほどしたある日の夜、早く書かなくてはという意識がほとんど強迫観念になっていたせいなのかどうかは知らないが、この原稿を書いた夢を見た。

その夢では、パソコンの画面がスクリーンのように映し出されていた。その脳内のスクリーンに、書き終わったばかりの原稿が拡大されていたのだ。まずはっきりと見えたのは、「B に倣いて」<sup>7</sup>という題名だ。原稿の全体の形式<sup>8</sup>もそのときに一望のもとに収めることができた。さらに、いくつかの細部の記述も目にすることができた。

原稿を書き終わった夢を見てから、実際に一行も書くことなく、また一ヵ月ほどが経過した。今度は、前とは事情が大きく違う。わたしはすでにその原稿を夢の中で書いてしまったのだ。一度書いてしまったものを、もう一度書くことほど面倒くさいものはない。そういうわけで、原稿が遅れている言い訳のコレクションの中に、「すでに夢の中で書いてしまった」という奇妙な理由が新たに付け加わることになった。

そうは言っても、その言い訳を使い続けるのは、冗談だとして受け取られないだろう。いかにその夢が本当に見た夢だと言い張って見たところで、誰も信用してくれないだろう。そこで本稿は、その夢で見た原稿を、薄れゆく記憶によってできるかぎり忠実に再現したものである。もちろんそれが、夢で見た理想のオリジナル<sup>9</sup>からははるかに隔たったものであることは言うまでもない。

## 注

### 1【柴田さんが早期退職する】

あれはいつだったか、たぶん停年が60歳から63歳に延長された直後だったと思うが、「1000メートル走れと言われて、やっとのことで1000メートル走ってこれでおしまいと思ったら、まだ500メートル走れと言われてたような気分になりますね」というような話を柴田さんから直接聞いた記憶がある。今ではそのゴールがさらに遠のいている。

実際に走っていると、どれほどのろくでもつついっただけで最後まで走ってしまうものなので、その意味でも、『長距離走者の孤独』ではないが、自らの意志で走ることをやめた柴田さんがうらやましくなる。

### 2【名著『生半可な學者』】

柴田さんのこの第一エッセイ集が名著である所以は、なんと言っても、その卓抜な題名にある。正直なところを告白すれば、わたしはこの本を手にとった瞬間に、まだ1ページもめくっていないのに、タイトルをただで「やられた」と思った。あのときの嫉妬に似た感情を、今でもぼんやりと思い出すことができる。

### 3【本棚のどこを探しても見つからない】

わたしは本を自宅、研究室、実家の三個所に置いている。自宅では主に洋書の小説、研究室では研究書、実家では和書と、本の棲み分けをしていたはずなのだが、最近ではその基本方針がまったく崩れてしまい、どこに何があるかさっぱりわからない状態になってしまった。そのせいで、本を読んでいる時間より、本を探している時間の方が長いような気もするほどである。本があふれて、棚の前後二列に置かざるをえなくなってしまったのも混乱状態の原因で、いったん奥に入ってしまった本はほとんど検索不可能になる。

自宅の本棚には、柴田コーナーもあって、柴田さんからご恵送いただいた翻訳書が並んでいるが、それはすでに一段では収まらず、次の棚にはみだしている。そこにあるかと思って、『生半可な學者』を探してみたが、残念ながら発見できなかった。おそらく、この原稿を書いた後で、どこかからひょっこり出てくるのだろう。本探しというのはそういうものである。

### 4【体調がすぐれない】

実際に、本稿を書いている時点で、わたしの体調はすぐれない。具体的に言うと、夏頃から、夜になると全身に痒みを覚えるようになった。わたしは深夜にしか仕事をしない人間なので、これでは気が散ってとてもこまる。やむをえず医者に診てもらったら、ストレス性の蕁麻疹という診断だった。わたしはふだんストレスというものを感じたことがない、鈍感な人間なので、思い当たるふ

しはどこにもないのだが、あえて原因を探すとすれば、この原稿が目に見えない重荷になっていたのだろうか。

## 5【身内に不幸があった】

そうやって親戚を何人もヴァーチャルに殺してしまった人がいるという噂である。ちなみに、わたしはこの言い訳を使ったことがない。

## 6【原稿を書いている途中でパソコンがフリーズした】

パソコンを導入した初期の頃は、実に頻繁にフリーズした。そのときには、被害を最小限に食い止めるべく、凍てついている画面に出ている原稿の一部を、原稿用紙に写し取ったものである。そんなことをするくらいなら、最初から原稿用紙に書いていた方がましだったのではないかと思わなくもない。

あるときは、中篇の翻訳がなんとか終わった明け方に、この恐ろしい事態が起こった。延べ何十時間かの労働が一瞬にしてペアになり、泣きそうになりながら、記憶でその訳稿を復元したことを憶えている。

またあるときは、ナボコフ関係の資料をまとめて入れていた USB メモリが読み出せなくなった。修理に出したが、結局のところ、ほとんどの資料は復元できなかった。しかしそのときは、不思議に晴れ晴れとした気持ちだった。台風が通過して、気がついてみたら天井が吹き飛ばされていて、そこから青空がのぞいているような気分だったと言えればいいだろうか。たいしたことではない、また一からやり直せばいいのである。

## 7【「Bに倣いて」】

夢で見たタイトルは、正確に言うところ“After B”<sup><1></sup>だった。ここで B とは、ジョルジュ・ペレックの英訳などで知られる、デイヴィッド・ベロス (David Bellos<sup><2></sup>) を指す。

わたしが夢の中で書いたはずの原稿は、デイヴィッド・ベロスの自由闊達な翻訳論 *Is That a Fish in Your Ear?*<sup><3></sup> (2011) を中心にした、翻訳をめぐるエッセイだった。なぜこの本をここで取り上げるかと言えば、文学作品の翻訳を論じた第 27 章で、諸外国に比べて日本での翻訳家の地位が高いことを説明したくだりに、柴田さんの名前が出てくるからである。

日本において、英語からの翻訳家で最も有名なのは、疑いなく柴田元幸である。彼の出版社は柴田元幸翻訳叢書を出しているし、書店はそのために特設コーナーをもうけている。彼の名前は表紙に出るだけでなく、著者の名前と同じ大きさの活字で印刷されているのである。

さらに続けて、ベロスはこう書く。

日本の文学作品翻訳家はイギリスやアメリカでの作家と同じくらいの地位を持っている。誰でも知っている作家兼翻訳家は数多いし、彼らについて書かれた『翻訳家列伝 101』という有名なゴシップ本まである。

はたして翻訳家はセレブなのか、日本人翻訳家のはしくれとしては多少疑問もあるが、それはさておき、せつかくここまで書いたのなら、小谷野敦の名前も出してほしかったと思う。

<1>

このタイトルを夢で思いついた、その無意識的な動機の一つは、今さら言うまでもなく、翻訳をめぐる大著である、ジョージ・スタイナーの *After Babel* にあったことは間違いない。

フロイト先生の教えを俟つまでもなく、夢の中では意味よりも文字の戯れが優位に立つ。わたしが *After Babel* から“After B”を思いついたその背景には、おそらく AB というアルファベットの並びがあったはずだ。それはもしかすると、スタイナーの念頭にあったことかもしれない、と夢想してみても楽しい。そう思えば、*After Babel* という題名を日本語に移植するときに、誰もが「バベル以後」と訳すだろうし、またそれ以外の手はないとわかってはいても、あえてそこに「アイウエオ」あるいは「イロハ」を組み込んで訳してみたいくなる。よく見れば、「バベル」の中にかろうじて「ハ」の親戚が入っているのではないかと……と、ここまで頭の中で妄想を追いかけたところで、夢から覚めた。

<2>

David Bellos を B ではなく、DB<2-1>と読んでみればどうなるか。DB でわたしたちがすぐさま連想するのは、ドナルド・バーセルミ (Donald Barthelme) である。実際、バーセルミは Don B. というキャラクターに化けたことがある。死後出版された、単行本未収録文集 *The Teachings of Don B.* の表題作を参照のこと。言うまでもないが、このタイトルじたいは、一世を風靡したカルロス・カスタネダの *The Teachings of Don Juan* のパロディである。

<2-1>

略語としての DB は、普通 database を意味する。

現在、日本の大学で流通しているこの種の略語に、FD という言葉がある。これが faculty development の略であることくらいは、どんな大学人でも知っているようになった。一昔前だと、FD 研修会のイントロダクションでは、「FD と言えば floppy disk のことかとお思いになる先生方も多いでしょうが……」というジョークが決まり文句だった。しかし、フロッピーディスクがほとんど存在しなくなった現在では、このジョークはもはや成立

しない。テクノロジーの移り変わりの速さは、ジョークの賞味期限まで変えてしまったのだ。

<3>

見ただけ変なタイトルである。そして、『生半可な學者』ほどではないにせよ、カッコいいタイトルでもある。

「あなたの耳の中にあるのは魚ですか？」と変換してみても、何やらシュールなイメージが浮かぶだけかもしれない。実はこの魚、ダグラス・アダムズの「銀河ヒッチハイクガイド」シリーズに出てくる、万能翻訳を可能にするバベル魚 (babelfish) なのだ。これをイヤホン代わりに耳に入れておけば、どんな言語でも、たちまち翻訳されて自国語で聞こえてくる、という夢のような魚である。なるほど翻訳論としてうってつけのタイトルだなあ、と読者は納得するはず。

ペロスのこの本とスタイナーの *After Babel* がこうして奇妙なつながり方をして、不思議に辻褃が合ってしまうのが、妄想の論理に従う夢のおもしろさだ。

それはともかく、この *Is That a Fish in Your Ear?* というタイトルから、連想のしりとり遊びで思いつくもう一冊の本がある。それは、*Is There a Text in This Class?* (邦題『このクラスにテキストはありますか』) という本だ。その著者が、スタンリー・フィッシュ (Stanley Fish) というのは、いくらなんでも偶然が過ぎはしないだろうか。ペロスにたずねてみたいところである。

フィッシュ本のパロディだという仮説をもとにすれば、そこを意識的に強調して、このタイトルを「あなたの耳に魚がありますか？」と妄想風に訳してみたくなる。

## 8【原稿の全体の形式】

本稿の形式は、円城塔の『烏有此譚』から借用したものである。

この小説は、初出の雑誌掲載のときには普通の小説（とはいえ、円城塔だからとても普通ではないのだが）の形をしていたが、単行本になるときに注釈が加わり、いわば注釈小説<1>になってしまったという、奇妙な経緯を持つ。

『烏有此譚』では、まず上段に配置された本文に一、二、……という漢数字で注釈番号が付される。そして下段に配置された注釈では、それぞれの項目に<\*1>、<\*2>……という形で注釈内注釈が付され、さらにその下位項目では<\*1-1>、<\*1-2>……というふうに降下していく<2>。いわゆるネスト構造である。いちばん深いところまで降りた項目は<\*1-1-2-1-1>で、本文が地上部分のレベル0、注釈が地下部分のレベル1、レベル2……だとすると、そこはレベル5<3>になる。

<1>

ナボコフの『青白い炎』を始めとして、ニコルソン・ベイカーの『中二階』、マーク・Z・ダ

ニエレブスキーの『紙葉の家』など、注釈小説は現代小説でよく見かける手妻になっている。こうした小説では、本文よりも注釈の方におもしろさの重点が移りがちで、実際、わたしは本稿を書くために『烏有此譚』の注釈部分だけを2回読み直した。

こういう路線を押し進めた、究極の注釈小説とでも呼ぶべきものが、Mark Dunn の奇作 *Ibid: A Life* (2005) である。この小説では、本文がなく、注釈だけしかない。

<2>

『烏有此譚』では、こうしてレベルが1つ降下するごとに、項目全体が2字分下げになる。下段の注釈部分は1行18字で組まれているので、もしレベル9まで下がれば、その項目は1行がわずか2字になり、さらにレベル10まで行けば、その項目を記述しているはずの文字はどこかに消滅してしまう。その瞬間に何が起るのか、見たかったような気もする。

<3>

こう書いていると、懐かしく思い出すのは、大好きな作家の一人、ジャック・フィニイの短篇「レベル3」である。ニューヨークのグランド・セントラル駅で、存在しないはずの地下3階が存在して、語り手がそこから19世紀末の世界にタイムスリップしてしまう話。タイム・トラヴェル物につきものの、タイム・パラドックスが起こるポイントを、実にスマートに処理しているのに感心する。

## 9【夢で見た理想のオリジナル】

今わたしの机には、本稿を書くための資料として、ウンベルト・エーコの翻訳論 *Mouse or Rat?: Translation as Negotiation* (2003) や、中野好夫の『英文学夜ばなし』、高橋康也の『ノンセンス大全』が積まれている。さらには、現在翻訳中であるナボコフの *Ada* の訳稿と、それに関連して、鳥声の翻訳を集めた「鳥の聞きなし」というサイト (<http://www5f.biglobe.ne.jp/~tsuushin/sub8.html>) のデータも用意されていた。それがいったい当初の夢ではどう相互につながっていたのか、今となってはさっぱり思い出せない。

### 独立した最後の注

ここで告白すると、ペロスの *Is That a Fish in Your Ear?* は、本棚を探してもなかった。そこでやむをえず、ペーパーバック版を注文したのだが、本稿を書いている最中に、ハードカバー版がひょっこり本棚から出てきた。まったくもう。

だったら、『生半可な學者』も注文すればよかったのではないかと今にして思うのだが、そうすれば少なくともわたしが原稿を書いた夢を見ることもなかったはずだし、本稿が現在の形にはならなかったこともまたたしかなのだ。